龍門の滝

那須烏山を流れる江川に、でっかい滝があってな。高さ二十メートル、横幅六十五メートルもある大きな滝で、その滝の中段に男釜、女釜という縦穴があって、昔から村の人たちに大釜、小釜と呼ばれていたと。

女釜はさしわたしが二メートルくれえなんだけど、男釜は四メートル以上もある大きな穴でな。その穴奥深く青黒い水ただえて、その深けえごと深けえごと、どこまで続くのか誰も知る人はなかったと。

「あのな、大釜には恐ろしい怪物が住んでんだぞ」

むかしから村の人たちに言われたんだけど、その姿見たもんは誰もいねえ。

ある時、滝の大平寺五十三代坊様は、

「もしもこの大釜に主がいるなら一度でいいから見てみたい」

と思ったと。滝の上段の大岩に、ささ竹四方に立ててしめ縄を張りめぐらし、祭壇を作

り、その前に座ってな。

「もしもこの大釜に主がおるなら、その姿を現わしたまえ」

手にした数珠をおしもみ、三七二十一日の間、一心不乱にお祈りを続けた。

すると、二十一日目満願の日の夕方、晴れわたっていた空がにわか真っ黒になったとおもうと、目もあげてらんねえほどの、大雨風が「ドッ」と吹き付けてきてな。

しばらくして、坊さん目あげっと、滝壺の波が「グワー」と巻き立ち上がり、大釜の中から大きな大蛇が現われたと。

その大蛇、頭にりっぱな角はやし、胴体に手足がはえ、大きな口から火炎のような舌を出し、火の玉のような目をランランと輝かせながら、ぐんぐんと大平寺めざしてのし上がっていったと。

そして、仁王門の屋根にぐるりぐるり巻き付くこと七周り半、棟に鎌首をのせた。

それでも、その尾っぽは大釜から出ることはなかったと・・・そして言ったと。

「わしは、向田篭山の大穴と、滝の大釜を行ったり来たり・・・山に千年、川に千年、二千年生きて龍となった。・・・この大釜の主は龍神である」

そう言うと、大釜の中へするするする、と姿消しちまったと。

ところが、この龍神様大変な神通力の持ち主で、ご祝儀や葬式など人が大勢集まる時に、ふるまいに使うお椀や、お膳の数書いて大釜に浮かべておぐと、次の朝、その数だけお椀やお膳が大釜に浮いてたと。

「龍神様、ありがてえ、ありがてえ」

村の人たちはたいそう感謝してたんだけどな・・・・・。

この村にじん助爺さんちゅう欲ばりな爺さんがいでな、自分が借りたお椀と御膳、お返しする時。

「俺くれえ、一個や二個返さなくともわがんめえ・・・」

自分げの戸棚に隠しちまったと。

その晩のごった。ぐらぐらぐら・・・大きな地震があってな。　向田篭山の大穴と、滝の大釜をつなぐ横穴・・・龍神さま通る穴が崩れちまったんだと。

それから、願い事してもお椀やお膳、貸してもらえなぐなってな。　横穴崩れちまったとごろを、穴切れって呼ぶようになったんだと。

そして、神通力のあった龍神さまの暮らしたこの滝を「龍門の滝」と呼ぶようになったんだと。

おしまい

参考資料　　野州からす山の民話　（烏山観光協会）